九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

エリック・ブノワ『ベルナノス，文学と神学』

野村，知佐子
九州大学大学院文学研究科 ： 博士後期課程単位修得退学

https://doi.org/10.15017/1430745

出版情報：Stella. 32, pp.77-81, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

《書 評》

エリック・ブノワ『ベルナノス，文学と神学』

野　村　知佐子

本書『ベルナノス，文学と神学』の主題は，ジョルジュ・ベルナノスを研究対象として，文学と神学の関わりを考察することにある[1)]。神学的資質によって培われたこのカトリック作家の生と作品が，ふたつのディスクールの交錯する場と看做されたのである。本書はその小説世界の分析のみならず，伝記や日記，同時代の作家フランソワ・モーリヤックとの関係にいたるまで，詳細に論じている。

ブノワはまず，作家の幼年時代にその萌芽をもつ神学的なものについて言及する。死への不安に押し潰されそうだった少年ベルナノスは，初聖体の日に初めて，幸福で素晴らしいものにすべきなのは生ではなく，むしろ死の瞬間であると感じる。己の生と死を神に捧げることによって彼は不安と闘うことを知る。この闘いは，彼にとって自身の子供時代に忠実であることを意味する。第１次世界大戦において塹壕での日々を体験することで，死への不安を基盤とした神との関係は，人々との連帯意識へと高まっていく。彼と同様，戦争で苦しむ人々は，全てその苦しみにより繋がりあっている。これこそが，キリストの聖体を通じた人々の連帯である諸聖人の通功にほかならなかった。彼はキリストの人生の絶頂を橄欖の園での死への苦悶のなかに見る。このテーマは作品のなかに繰り返し現れることになる。

しかしながらベルナノスは虚構にたいして不信感を抱いていた。この不信感は『悪魔の陽の下に』(1926) の作家サン＝マランや『欺瞞』(1927) の背教者セナーブルなど，文筆活動を行う虚偽的な登場人物のなかに反映されている。だが小説という虚構は同時に，ベルナノス自身が「現実」と信じたものに形を与える場でもあった。それゆえ彼は自分の小説を現実と呼んだのである。ところで，彼にとっての現実とは日常的な意味での現実ではない。それは超自然的なもの，すなわち神の臨在を意味する。言語による定着を拒むこの存在を，物理

的に感覚できるものにしなければならない。彼が選んだのは，悪という迂回路の経由によって神に到達することだった。神の存在を表すための悪の描写――。こうした逆説を明確にするには，マラルメの詩が対象を，その不在そのものによって表わしているとするモーリス・ブランショの指摘を思いおこせばいいだろう。『悪魔の陽の下に』でドニサン神父が，後に多くの人々を救済することとなる幻視の力を，悪魔との邂逅を通じて手にすることが描かれるとき，ベルナノスはいわばその不在によって神の臨在を浮かび上がらせたのである。では，超自然的存在が人間的時間に介入するとき，それはいかに描かれるであろうか。

人間的時間の概念は，過去・現在・未来に区分される。これにたいし神の遍在性は３つの時制を同時に持つ。創世記において神の「光あれ」（創世記１－３）という言葉とともに光があったことが，それを象徴する。人間的時間と神の遍在性というこの対立関係は，19 世紀の小説群とベルナノスのそれとの間に見受けられる。例えばエミール・ゾラが，人間の社会悪を遺伝によって説明しようとするとき，それは明確な因果関係を成立させることにほかならない。つまり時間軸が設定されるということである。しかるにベルナノスがその小説世界で表現しようとするものが神の臨在であるなら，そこでは人間的時間が破壊されることは断るまでもない。当然，因果律は無効とされる。なぜなら超自然的存在の人間的時間への介入によって，人間の生は根本より覆され，過去における何ものも結果を予測することはできないからである。このように人間にたいする超自然的存在の介入とは，時間軸のなかへの永遠の侵入であり，それは瞬間という一点に凝縮される。それゆえに瞬間は時間軸に属していながら同時に永遠であるという異物，奇妙なものとして認識される。「登場人物が決定されるに先んじて，作中で語られる「状態の急変」が作者のなかに生まれていたとしても驚くには当たらない」と『欺瞞』を評したのはアンドレ・マルローである[2)]。人物が存在した後に心理的葛藤が生ずるという時間的秩序は，すでに創作の段階において意味をなさぬであろうことが指摘される。それほどまでにベルナノスの作品世界に介入する超自然的存在は時間性を無効化するのである。

以上のように，ベルナノスにとって超自然的なものこそが現実であり，それは逆説的に不在によって表されること，その介入は人間的時間を破壊する瞬間として捉えられることを述べた後，ブノワの論考は神学的なものの頂点である『新ムーシェット物語』（1937）へと向かう。無知と孤独のために自分の苦しみ

を語る術すらもたぬ貧しい少女の自死にいたるまでの物語が,「神に捧げられた愛の物語」へと変容する過程をブノワは追う。ムーシェットを取り巻く環境は唾棄すべきものだ。アルコール中毒の父，母の病死，学校では女教師からの苛めと級友たちからの無視，村人たちの底意地の悪い好奇心……。痛手だったのは彼女が愛した少年からの強姦という身体的侵犯，だが，それよりもさらに悪いのは香部屋係の老女からの精神的侵犯である。この老女はムーシェットに自分を憐れむことを教えた。それでもこれら全てのことは，まだ彼女を死へと誘わない。しかし出会いがしらにひとりの老人に無視された瞬間，この取るにたらぬ出来事が引金となって，彼女は死に赴いてしまうのである。ここにおいて自殺は超自然的な現象のひとつとして描かれている。人間の理性はこの現象を説明する術をもたぬ。こうした人間の無知を象徴するかのように，ムーシェットは自分のことも，自分に何がおこっているかも知らない。例えば軽蔑の何たるかを知る由もなく，暴力的な父や自分を苛む女教師を軽蔑していることを，自分が人を軽蔑できる人間であることを彼女は全く知らないのである。母の死によってあらゆるものへの反抗心を掻き立てられた彼女は歩みに歩む。人々を次々に追い抜きながら歩む。彼女の愛した少年が彼女を愛し返さないのなら，ムーシェットの愛は容赦なく彼を追い抜いていくだろう。最後にはその愛を受けとるに相応しい者はもはや神しか存在しなくなるだろう。この神なき世界の悲惨な物語を「神に捧げられた」ものに変えるのは，ムーシェットの凶暴なまでの頑なさなのだ。しかしながら，この歩みの途上でついに彼女は力尽きて倒れる。死を目前にした彼女が村を見つめて涙を流すとすれば，それは絶望のためではなく，生命への愛のためである。『田舎司祭の日記』(1936) の司祭が癌を宣告されて泣くように，彼女もまた不治の病を宣告されたかのようである。ゆえにベルナノスはムーシェットの死を自殺であるとは考えない。そればかりか，無垢の彼女が村人たちの悪の結果として死ぬのなら，彼女の姿には，自らは罪をもたず人類の罪を贖って死ぬキリストの姿が反映されさえするのだ。

さて,『新ムーシェット物語』における神学的なものの考察を終えた後ブノワは,『辱しめられた子供たち』(1948) を取りあげることによって，神学と文学という主題から神学と政治という主題へと移行する。なぜならベルナノスの書記行為の領域は文学のみならず政治にも及んでいるからである。ここで明らかにされるのは，政治の基盤たる国家フランスにたいするベルナノスの意識であ

る。彼の自伝ともいうべきこの作品は1939年9月から1940年5月にかけてピラポラで執筆された。国内外を問わずさまざまな土地に住んだベルナノスは，遠方にたいする癒しがたい思いを生涯にわたって持ちつづけた作家として知られている。だがブラジルのこの村は，かつてないほど彼に流謫の身の孤独を感じさせる。孤独から脱出する唯一の手段とは，逆説的に孤独のなかを歩みつづけることだ。仮借ないムーシェットの歩みが神へと通じたように，ベルナノスは最もフランスと切り離されたこの土地に祖国を見いだす。『辱しめられた子供たち』に登場するのは，彼の子供時代の聖なるフランスにほかならない。ベルナノスの政治思想に言及するとき，彼の語るフランスが神学的意味に貫かれていることを忘れてはなるまい。こうした彼の政治姿勢は，当然彼に孤独を強いることになろう。

第2次世界大戦中，ブラジルでナチズムと戦い，レジスタンの精神的支柱となるも，帰国したベルナノスは，権力を掌握した元レジスタンスの闘士たちに与することはなかった。かつて『月下の大墓地』(1938) でカトリック王党派の彼が，全体主義とそれを容認する教会の偽善を激しく糾弾したように，党派を超え，ひとりのキリスト者として彼は行動する。戦後のフランスで彼の攻撃の矛先が向かったのは，カトリック信徒である知識人の共産主義との共闘である。モーリヤックのフランス人民共和派への接近も攻撃の対象となった。フランス本国でレジスタンス運動の一翼を担い，海外の同志の帰還を待ちわびていたモーリヤックの失望は大きかった。だがベルナノスは共産主義を非難せずにはいられなかった。なぜなら共産主義的観点から，撲滅せねばならぬ社会悪のひとつとされる「貧しさ」は，彼にとっては福音に適った徳以外のなにものでもなかったからである。それは神によって聖別され，キリスト自身が自らを同一化したものである。ベルナノスによる共産主義批判の根底にあるものを見るとき，社会参加へと彼を向かわせたものは，政治にたいする情熱ではなく，彼を創作へと駆り立てたものと同じであることが理解される。和解と確執を繰り返し，ベルナノスの死後，モーリヤックは次のように述べるにいたる――「ベルナノスのような人物には，彼が自分自身であること，かつてそうであった人間でありつづけること以外に，望むべきことは何もないのだと私たちは即座に理解した。神秘主義者が子供の精神と呼ぶところのものを体現し，それに言葉を与えること，この世界には彼にとってそれ以外の使命はない」[3)]。ベルナノスの

政治姿勢もまた『新ムーシェット物語』の主人公のそれと同じく，神へと至りつくためのものであることが理解されよう。

ベルナノスの小説世界の分析にとどまらぬ本書は，伝記や日記，同時代人作家との確執にいたるまで，この作家の歩みを多角的に論じている。だがそうした視点にもかかわらず，本書の各章は神学という主題に貫かれることにより有機的な繋がりを呈している。ベルナノス作品の時間性について考察したジョルジュ・プーレ，『ウィーヌ氏』の真価を初めて明らかにしたクロード＝エドマンド・マニーらの忘れえぬ先行研究が統合され，神学の名の下に息づきはじめることにも心を動かされる。そればかりではない。神の臨在という不可視なものに形を与えようとするこの作家が，政治という現実にいかに参与していくのか——そういった根本的問題を考察するための貴重な指針を本書は提供してくれるのである。

註

1）Éric Benoit, *Bernanos, littérature et théologie*, Paris : Éd. du Cerf, 2013.

2）Voir André Malraux, «L'Imposture», in *Études bernanosiennes 15*, Paris : Lettres Modernes Minard, 1974, pp. 121-123.

3）François Mauriac, *La Paix des cimes*, Paris : Bartillat, 1999, pp. 125-126.